

《編集後記》

『日蓮学』第二号をお届けいたします。本号はまず、身延山大学にて開催されました第七十回日蓮宗教学研究発表大会特別記念講演「日蓮学の構築」にてご講演いただきました渡邊寶陽先生に、その内容をまとめて頂きました。次に【特集】として「木村日紀先生特集」を組み、各先生方より寄稿頂きました。渡邊寶陽先生の「木村日紀先生を憶う」においても記されていますが、木村日紀（龍寛）先生は東洋大学を卒業後、仏教の源流を学ぶためバングラデシュ・チッタゴン、インド・カルカッタなどへ留学。その後、カルカッタ大学教授に就任されます。故・我妻和男先生は「日印の懸け橋 木村龍寛」にて、木村先生がチッタゴンでのベンガル人との邂逅の中で、語学を学ぶのみならず、ベンガル仏教協会と深い関係を構築されていたことを記され、とりわけインドの偉大な詩人であり、思想家であったラビンドラナート・タゴールとの関係について強調されています。さらに故・奈良康明先生は「一九五〇年代後半のベンガル仏教（追想）」において、木村先生との出会いとその講演に感銘を受けたこと、そして当時のベンガル仏教の状況について記されています。本特集にご寄稿頂いた後、奈良先生はご逝去されました。先生の学恩に対し甚深の謝意と、増円妙道を衷心よりお祈り申し上げます。また【資料紹介】として、故・浅井圓道先生・都守基一両先生の「行学院日朝撰『補施集 序品ノ三』翻刻」を収録いたしました。本翻刻は『日蓮学』の前身である『身延山大学東洋文化研究所紀要』からの継続であり、今後も引き続き都守先生によってご寄稿頂く予定となっております。最後に本研究所のラオスプロジェクトの【研究報告】として、ジル・エマ・ストロースマン先生が中心となって研究されている「カモク」に関する調査報告を収録しました。今回はカモクの使用方法をはじめとして、その強度や配合分率などに着目し、ラオスにおける古式用法を探るものとなっております。

末筆ではございますが、本研究所に対するご理解・ご支援の程、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。（木村中一記）